

つくづく、自分は罪深い人間だな、と思うことが多々ある。

除夜の鐘は百八つ、ヒトの煩惱の数だけ鐘をつくという。
はたして、私の煩惱は「百八つ」で事足りるのだろうか……。
206ccのホイールのPCDでさえ、108^ミ。見事に煩惱マシンである。

強欲さに加え、嫉妬深い。およそ誰もが持っている、このドロドロした感情なら
他の誰にも負ける気がしない。

このサイトによく名が出る、前田に嫉妬から殺意を抱くことがある。

彼は常に自然体で、マイペース。
コトを筋道を立てて考え、それから行動に移すタイプ。
一方、私は歩きながら考えるタイプ。粗方、そのベクトルは相対的である。

前田は、何をやっても、言っても、一般的なウケが良い。
それは彼が自然体であり、どのような環境にあろうと、誰に対峙しようと
気負わず、普段と何ら変わらない、という安定感があるからだろう。
カッコつけようとか、よく見られたい、とか、そういう感情が無い。(ように見える)
私は言わずもがな、その対極の立場で、自尊心の塊である。

そんな我々だが、ベクトルが違うにも関わらず、不思議なことに価値観は似通っているらしい。
これは不可解である。互いの方向性が違うにも関わらず、行きつく先が同じというのは
数学ではあり得ないだろうが、これこそが人間の奥深さ、なのだろうか。
極論するなら、つまり我々は互いに、自分の好きなコトを好きなようにやりたい、そんな
人種なのかもしれない。

お互いもう長い付き合いだけに、奴の考えそうなこと、言いそうな台詞は大体想像がつく。
実際に耳にしなくとも、奴の思考を頭でシミュレーションすれば、勝手に私のココロの内
で架空の前田が話始める。
大したもの、事後確認の為に「どう思う？」と聞くと大概、ココロの声の通りであるのだ。

お互い、好みも似通い、着眼点や発想も近い筈なのに、彼のほうが一般的に受け入れられやすい。
そんな前田に嫉妬する。自分と対極である彼に。

前述で殺意を抱く、と表現したが、ところが実際に彼の存在を最も必要としているのは
自分自身に他ならない。
一般的に受け入れられにくい私を認め、信じてくれる本当に数少ない他人、だからだ。

そして今日もまた、無意味な長電話。



[GO to TOP PAGE](#)